

介護難民を出さないために

これまで改悪されていった 介護保険

- 2005年
- 施設サービスの部屋代・食事代の原則全額自己負担
 - 要支援1・2～要介護1 「軽度者からのベッド貸しはがし」
 - ヘルパー生活援助の時間短縮「生活援助は45分に」
 - 特別養護老人ホーム入所要件は原則「要介護3以上」
 - 一定以上の所得がある人は自己負担割合が1割→2割に
 - 「介護予防・日常生活支援総合事業（以下、総合事業）」が創設
 - 要支援1・2の訪問介護と通所介護「全国の市町村が総合事業へ移行」
 - 生活援助中心型の回数制限「介護度による上限回数を設定」
- 2018年
- 一定以上の所得がある人は自己負担割合が1割→2割さらに3割に

介護保険制度の変遷にみる

2000年4月に始まった介護保険。介護保険制度の目的は「加齢に伴って生じる心身の変化による疾病等により介護を要する状態となった者を対象として、その人々が有する能力に応じ、尊厳を保持したその人らしい自立した日常生活を営むことができることを目指しています」とあります。この実現のため、必要な保健・医療サービス及び福祉サービスが給付されます。行政や私たちが専門職は、高齢者本人の決定を情報提供やサービス給付で支援しますが、決定権はあくまで本人にある、というのが基本的な考えなのです。



大野穰一先生を 悼む

種一先生へ
「点滴の量が多すぎや、心電図そんな読みじゃあかん、私が研修医時代はこわかった。」
「モンダイだ」は政府を叱る時ですね。
全日本民医連では時々うちの前副産が話に出るんです。ある元幹部は、みみはらの大野先生、両方を助けなきゃと思った、って。
「こわい」したらえんか教えて、最近先生が私に助けを求めようになりました。
ちよつとこわく、悪政に怒り、全日本に心配され、晩年は可愛らしくなりました。お疲れさま、お休みください。ごゆっくり。
(理事長 斎藤和則)

故 大野穰一先生のご略歴

- 1943年3月 大阪府で誕生
- 1968年3月 大阪大学医学部を卒業
- 1973年1月 同仁会耳原総合病院へ入職内科部長に就任(29歳)
- 1981年11月 耳原総合病院副院長に就任(38歳)
- 1990年3月 全日本民医連副会長に選出(47歳)
- 1996年3月 同仁会理事長に選出(53歳)
- 1997年3月 大阪民医連会長に選出(54歳)
- 1998年2月 全日本民医連副会長を退任、顧問に就任(54歳)
- 1999年2月 大阪民医連会長を退任、顧問に就任(55歳)
- 2004年8月 同仁会理事長を退任、定年退職されるも外来診療は継続(61歳)
- 2019年12月15日 逝去、享年76歳

大野先生を偲ぶ会はコロナウイルス感染防止のため延期します
主催「大野穰一先生を偲ぶ会」実行委員会

スタートから20年、介護保険は制度改正を重ねるたびに、ここごとく改悪されていきました。介護を受ける本人、そして介護を担う家族の多様なニーズに応えるために、利用できるサービスの幅を広げる必要があるはずなのに、実際にはサービスの縮小と言える内容改悪ばかり。にも拘らず介護保険料は3年ごとに値上がりしています。

ケアマネジャー目線で、ざっと挙げて、「尊厳の保持」には程遠い内容ばかりです。

2021年の制度改正に向けては、在宅介護支援費の自己負担導入(ケアプラン有料化)も審議されています。経済的な理由から必要な介護サービスを利用できなくなるなどの反論が相次ぎ、今回は見送りとなりましたが、介護が必要な方が利用を控え、状態を悪化させることが懸念される、このような案が毎回、審議の場にあがることに憤りを覚えます。

要支援者の訪問介護と通所介護

ケアマネジャー目線で、ざっと挙げて、「尊厳の保持」には程遠い内容ばかりです。

2021年の制度改正に向けては、在宅介護支援費の自己負担導入(ケアプラン有料化)も審議されています。経済的な理由から必要な介護サービスを利用できなくなるなどの反論が相次ぎ、今回は見送りとなりましたが、介護が必要な方が利用を控え、状態を悪化させることが懸念される、このような案が毎回、審議の場にあがることに憤りを覚えます。

介護事業部
ケアマネジャー
甘田 尚子



この3月からNPO法人結いの会ともうずの事務局長を後継者にバトンタッチされる大坪笑子さん。「無差別平等」の理念を大切にしてこられた耳原での半世紀の思いをお聞きしました。

—自分にとって「みみはら」って何？—
かまほご兵舎の時代から、半世紀近く耳原で人生を歩ませていただきました。耳原は自分の人生そのものと感じています。多くを学ぶ多くの人とふれあひ繋がり、無差別平等を貫く耳原の歴史に50年近く関わられたことを誇りに思っています。

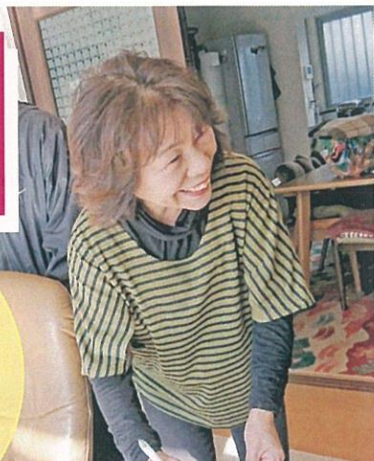
—この仕事をしていて感じている「やり甲斐」は何ですか？—
往診・訪問看護・訪問介護を受けていても、ちよつとしたことを誰にも頼めず、困っている方がたくさんあること「住み慣れたまちで住み続けられるまちづくり」といっても、それがどれだけ大変なことなのかよくわかりました。結いの会ともうずの活動を通して、「一つひとつの困難を支え、住み慣れた町で安心して豊かに暮らせるようお手伝いができること」に、やり甲斐と喜びを感じています。

人間の究極の幸せは、「一人に必要なとされること」であり、支援する人にとっても、誰かの役に立つことで豊かな人生につながる

シリーズ みみはらの人⑥

みみはら 十人 十色

有意義な人生にするためにも…
人と人とのふれあいを大切に



おとつば えみ こ
大坪 笑子さん
NPO法人結いの会ともうず代表理事

1949年生まれ。大阪府堺市出身。同仁会へは1971年入職。病院、診療所などを経験し、2014年から「ワンコイン助っ人隊」や「おでかけ助っ人隊」などの支えあい事業の事務局長として奮闘してこられました。